優秀賞（中学校部門）

人と人とをつなぐ

和歌山県立桐蔭中学校　二年　　阿部　真奈

「和歌山県の特産物といえば？」と聞かれたら、何と答えるだろう。多くの特産物がある中で、私は真っ先に「有田みかん」が思い浮かぶ。なぜなら、有田みかんは私の生活の一部になっているからだ。

私の両親は、有田みかんを取り扱う会社に勤めている。それぞれ別の会社に勤務しているが、どちらもみかんを育て、加工したり販売したりするそうだ。私のお父さんは営業部、お母さんは商品開発部兼、カフェの店員として働いている。

私は二人を見ていて「楽しそうに働いているなぁ」とつくづく思う。例えば、お母さんは「今日お店に外国の人が来てくれた！」と言って英語の勉強を始めたし、お父さんは「営業先で有名な人に会うことができた」と、とても嬉しそうだった。

また、お母さんはみかんの収穫や摘果の時期になると、知り合いの農家さんを手伝いに行く。そこで知り合った人たちとは、今でも連絡を取り合うくらい仲良くなっていた。私も小学生のときのみかんの収穫体験で教えてくださった農家さんに、自然にあいさつができるようになった。どれもこれも「有田みかん」がきっかけになってくれていた。「有田みかん」はコミュニティを広げる一つのツールとしても大切なのだ。

しかし近年、有田みかんを育てる農家さんの数が減少している。このままでは、和歌山県の特産物が一つなくなってしまうかもしれないし、新たな出会いの場も減ってしまう。また、冬の訪れが感じられる山一面のオレンジ、夜に響く水やりのスプリンクラーの音、毎朝走っている二ｔトラックなど、見慣れた光景がすべてなくなってしまうのは寂しい。

そこで、アグリビジネスを積極的に取り入れていくのはどうだろうか。農業体験付きの宿泊施設などをつくることで、農業に興味を持ってくれる人が増えるかもしれない。また、農業法人として活動することで「後継者問題」や「耕作放棄地や荒廃農地の増加」といった農業が抱える様々な問題も解決することができる。そして、機械の力を駆使したスマート農業を発展させることも大切だ。急斜面で収穫ができるロボットが実現するのは少し先の未来かもしれないが、みかんの選別や水やりには取り入れることができると思う。機械を購入するとなれば高額になってくるが、農業を法人化することで一人一人にかかる負担が減少し、機械化が進んでいくだろう。

農業に興味を持ってもらうには、農家さんは和歌山県の特産物を守っていて、人と人をつなぐきっかけをつくる、誇らしい職業だということをアピールするのが大切だ。

そして、二〇四〇年頃にはもっと美味しいみかんが食べられて、みんなが生き生きとした和歌山県になっていてほしい。